



文学散歩

前田 明

(神奈川県)

『新東京文学散歩』を読んだのは国文学徒になりしその春

野田宇太郎は「序」に記したりこの本を「足で書く近代文学史」と
焼け跡の東京の町を宇太郎はただに歩けり戦後まもなく

歩き始めは昭和二十五年十二月、二十六年六月本書刊行

図書館で五十年ぶりに開きたり『新東京文学散歩』初版本を

「寶玉を求むること」と記しあり焦土東京を歩く願ひを

織田一磨の挿し絵もよろし写真にはない建物の趣きがある

「ただ歩いた。或日は五里、また或日は七里。靴も破れた。」凄し

巻末の索引多し 人・書名・橋・坂・川・墓地・神社仏閣：

歩きたくなくなりて尋ぬる子規庵は昔のままに町中にあり

戦災の街を迷ひて探せりと宇太郎記す子規庵の項

庭にある子規が愛でにし草木を細かく記す宇太郎は嬉々と

「我に二十坪の小園あり」と子規書きし庵の庭をただ眺めゐる

「文学散歩」の言葉をしかと残したり文学青年野田宇太郎は

宇太郎の法名をかし「文学院散歩居士」とは誰がつけしか

このごろの私

昨年十一月、脊柱管狭窄症
で頸と腰の手術をした。頸は
固定術で楽になったが、腰は
狭窄している箇所を抜けただ
けなのでまだ痛い。散歩復活
のために、ストレッチ、筋ト
レ、がんばらねば……。



ガンマン 「癌人」の妻

荒巻 睦代
(宮崎)

このごろの私
最近、あれはいつだったか
と記憶が曖昧に。一年、三年
の日記は続かず、友に勧めら
れて今年から十年日記をつけ
始めた。四行なので書きやす
い。今のところ続いているの
で、十年書き続けたい。

入院も手術も自分で決めし夫 報告聞くのみ「癌人」の妻

線香は不要その分吸ひたしと屁理屈の夫たばこ止めざりき

医師の言「声が出なくなりますよ」咽頭癌の夫たばこ止めにき

焼酎は喉越しつらくビールのみ吞みるたる夫「吞めるうちが花」と

病室で「家に帰る、帰る」と叫びゐしが「おらんだ甲斐があった」と夫は

台風での停電に備へ病院より携帯用酸素ボンベ届けり

使はずに済んだ携帯用酸素ボンベ回収早し台風去りて

点滴の入らなくなりし夫の腕、脚をさすれり服の上より

点滴のはづされ三日後の夜に見守られつつ夫は息絶えき

夫逝きてレンタルベッド運び出され広びろとした虚無のくうかん

長男と夫の通ひしスナックへ遺歌集届けぬ『癌人のうた』を

うちひさす都城に四十年夫亡きあともなほ住み続く

鉛筆の夫の字残る『北窓集』辞書を引きつつ読みし証ぞ

亡き夫の遺歌集出版記念会に気力なく欠席したりしを悔ゆ

亡き夫の鉢のアマリリス咲いたよとラインの写真いもうとより来る